

読書

県図書館の前身にあたる「岐阜県教育会附属図書館」が、当時の物産館内に閲覧室を持たない「貸付図書館」としてスタートしたのは一九〇四(明治三十七)年のことである。

明治の中ごろ、各地に

岐阜県教育会は郡・市教育会からなり、県の補助金を得てさまざまな事業を行っていた。その事業の一つが図書館の運営で、このような図書館を前身に持つ県立図書館は全国に十数館ある。

岐阜県教育会は、郡・

県図書館に行こう

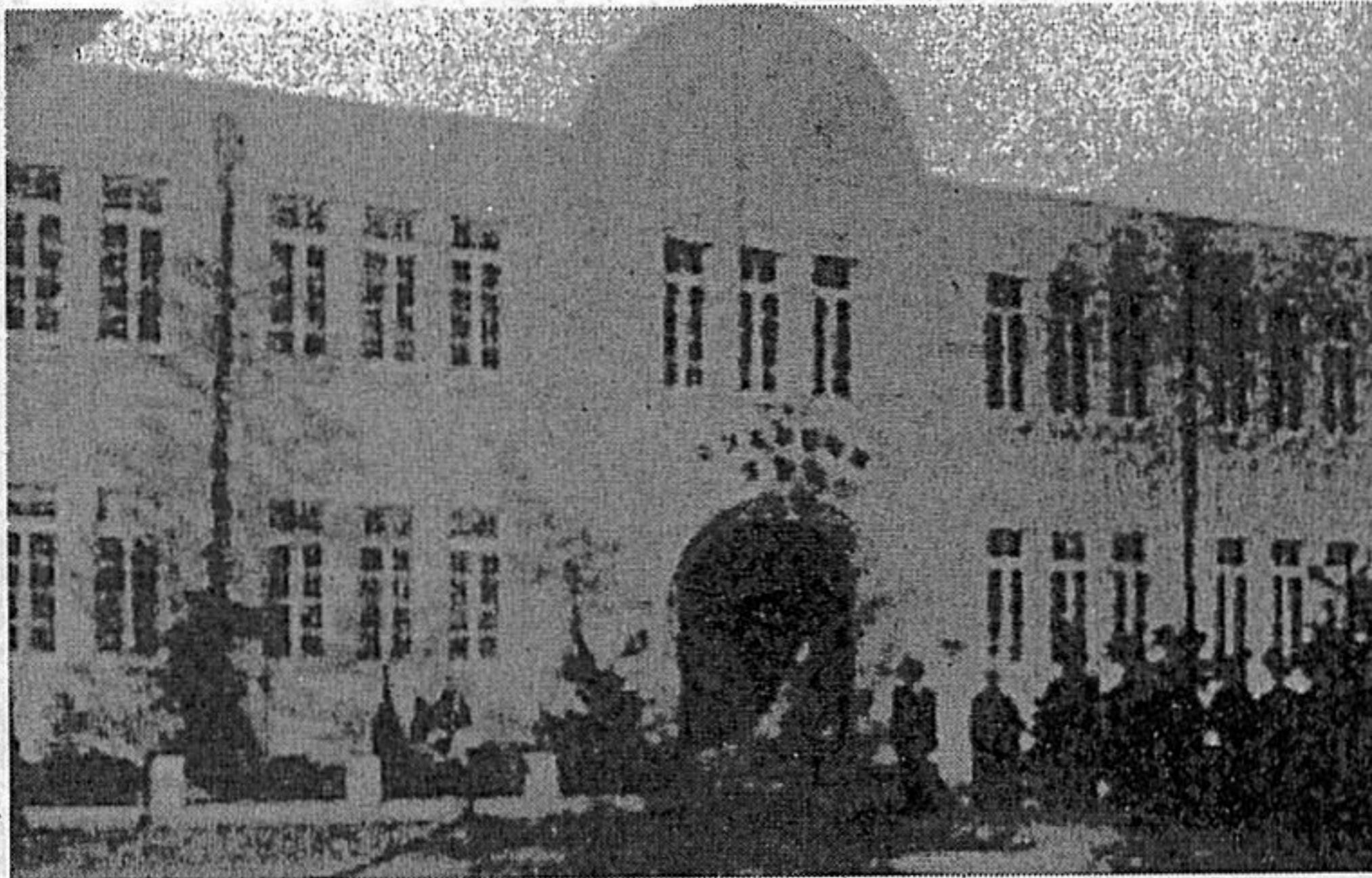
こんな情報^①が待っている

地方教育会が誕生した。教育の向上をめざし、教育に関する研究を行ったり、行政からの諮問に答える団体として道府県、郡、市区町村単位で設置され、教育関係者や有識者、地方議員がその構成員だった。

市教育会や会員個人に対する貸出のほか、十二歳以上の人への館内無料閲覧サービスや、遠方の人のためには回覧文庫・巡回文庫サービスも行っていった。

一九二六(大正十五)年、「県教育会図書館兼

県図書館の蔵書の核に



大正末期、県教育会附属図書館が初めて独立館舎として入った県教育会図書館兼会館—岐阜市美江寺町

会館」が岐阜市美江寺町の南隣に残っている。に開館し、初めて独立館舎となった。この建物は、一九三四(昭和九)年にも、旧岐阜大学附属病院に創設される「県立岐

阜図書館」の蔵書の核となる。

当時の蔵書の内容については、県教育会が発行した「岐阜県教育会雑誌」に掲載された蔵書目録によつてうかがい知ることができる。一般資料は、幅広い分野にわたる古今の学術書、教養書、教育関係図書。郷土資料は、歴史や地理を中心に基本的な文献が収集されていた。

特に「新撰美濃志」の刊行で知られる郷土の歴史家・神谷簡斎から当時寄贈された「簡斎文庫」には、関ヶ原合戦関係の和書(写本)など貴重な資料も多く、「簡斎」の蔵書印のある資料を今も目にすることができ